

居酒屋

ぼったくり

秋川滝美 Takimi Akikawa

おかわり!

2

目次

遠くて近い仲……………
323

浴衣が取り持つ縁……………
251

獣医師の胸焼け……………
167

居酒屋の継ぎ方……………
83

無口な店主……………
5

無口な店主

銀鯊のバター焼き

小松菜のみぞれ和え

出汁巻き卵

ホタルイカの天ぷら

葱の焼き浸し

平成四年一月四日の朝、シンゾウはいつもどおりに散歩に出た。

シンゾウは東京下町のとある商店街で『山敷薬局』を営んでおり、客はもっぱら近隣、この商店街に店を構える人や裏通りの住人である。

薬を売りたいのは山々だけれど、それ以前に元気でいてほしい。健やかな日常を保つために、治療よりも予防に力を注ぐ、というのが『山敷薬局』の経営方針である。だからこそシンゾウは日々近所を歩き、住人たちの健康観察に勤しんでいた。

——おや？　ここ、新しい店が入るのかな……

シンゾウが足を止めたのは、商店街の中程に位置する空き店舗の前だった。

閉めっぱなしだった戸口が開放され、中から人の声がする。そっと覗いてみると、書類を持った男と四十歳前後と思しき夫婦がいる。おそらく男は不動産屋で、夫婦者は店を開きたくて物件を探しているところなのだろう。

ここは以前、居酒屋だった。シンゾウも一度入ったことがあるが、ビール一杯にしてもけつして安くはない値段だった上に、出てくるのは冷凍食品のほうがいいと思うような料理ばかり……うんざりして、それきり足が向かなかった。

この商店街には他に居酒屋どころか、飲食店すらない。だからこそ店主は、それでも客が来ると思ったようだが、駅から離れた商店街で、そんな強気な商売が通用するはずがない。長くは持たないという予想は見事に的中し、二年も経たないうちに潰れてしまったのだ。

それからすぐに『テナント募集中』と書かれた紙が貼られたが、これまで借り主が決まる様子はなかった。商店街の真ん中に空き店舗があるのは見栄えがよくない。どんな店でもとりあえず埋まってほしい。そして、できれば居酒屋であってほしい。

実はシンゾウは、かなりの酒好きだ。家で呑むのもいいが、たまには店で杯を傾けたい。となると、近場に気軽に寄れる居酒屋ができるのは大歓迎なのだ。

とはいえ、いつまでも覗き込んでゐるわけにはいかない。成り行きが気になりつつも、シンゾウは再び歩き出した。

空き店舗に夫婦者が来ていたのを見てから半月ほどしたある日、男がひとり『山敷薬局』に入ってきた。冷蔵ケースから栄養ドリンクを一本取り出し、レジに持ってくる。

「飲んでいけますか？」

ふらつと入ってきた客が一本だけ栄養ドリンクを買った場合は、その場で飲むことが多い。持ち運ぶのは面倒だし、ゴミを捨てていけて便利だからだろう。

当然この男もそうするだろうと思ったが、彼は意外にも首を左右に振った。

「いえ……持ち帰ります」

「じゃあ、袋にお入れしますね」

そこで男の顔に目をやったシンゾウは、ついまじまじと見つめてしまった。なんだか見覚えがある気がしたのだ。数秒考えて、はっとした。

——この前、空き店舗を見に来てたやつじゃねえか……ってことは、決まったのか？

そう考えながら、数枚の百円玉と引き替えに栄養ドリンクを渡す。男は軽く会釈して袋を受け取り、そのまま店を出ていった。

もしもあの店を借りるのであれば、新しいご近所さんになる。挨拶のひとつもしておきたいとは思ったけれど、どうして事情を知っているのだと不審がられるに違いない。覗き見が趣味だと思われるのも嫌なので、そのまま見送るしかなかった。

それから十分後、今度は女がやってきた。もちろん、さっきの男と一緒に店を見に来ていた女だ。

女は冷蔵ケースではなくペットボトルが並んでいる棚に向かい、お茶を一本持ってきた。

おそらく今日もあの空き店舗を見に来たのだろうけれど、ふたりで来ておきながら別々に飲み物を買ってくるのは珍しい。相手の飲み物の心配もできないほど気が利かない男なのだろうか。それでは店を構えたところで、上手くいきつこない……と心配になってしまった。

ところが、そんなシンゾウをよそに、支払いを済ませた女は至って気軽に話しかけてきた。

「ちょっとお訊ねしたいことがあるんですけど」

「なんででしょう？」

「この先にある空き店舗、前はどんなふうだったかご存じですか？」

「どんなふう、という？」

「お店を閉めた事情とか……」

「え……？」

思わずぎょっとしたシンゾウに、女は慌てて説明を加えた。

「すみません。唐突すぎましたね。実は私、あのお店を借りようかと思ってるん

です。で、居酒屋を始めようと思ってるんですけど、不動産屋さんの話によると、前も居酒屋だったみたいで……」

「ああ、なるほど……同じ居酒屋をやる身としては、前の店が閉めた事情を知りたいんですね？」

「そうなんです！」

—— ははあ……さては、さっき来た旦那も同じことを訊きたかったんだな。ところが、訊き出せずに戻っちまって、やむを得ずかみさんが登場ってことか……確かに、どう見ても訊き込みには向かないタイプだった。世間話からそれとなく、というのも、このかみさんみたいに単刀直入に、というのも無理だろう。しゃべるのが苦手すぎると、客商売は難しいだろうに……

そんなことを考えつつ、シンゾウは前の居酒屋の様子を女に教えた。良心的とは言えない価格と冷凍食品以下の料理のせいで、客が定着しなかったのだろう、という推測に、女はほっとしたように頷いた。

「じゃあ、ヤクザともめたとか、食中毒とかじゃないんですね？」

「それはありませんね。このあたりはわりと治安がいいんです。ヤクザもチンピラも見かけませんし、食中毒を出したって話も聞きません。単に前の店主のやり方が下手だっただけでしょ」

「よかった……。同じ居酒屋をやる以上、前の店が変なことをやってたら影響を受けちゃうかな、って心配だったんです」

「影響……？ それは大丈夫でしょう。店の名前だって変えますよね？」

「もちろん。でも、居酒屋って案外『あのあたりにある店』ぐらいの認識で、店名まで覚えていないこともあるでしょう？ 『商店街の真ん中ぐらにある居酒屋』だろ？ 前に食中毒を出したよな？』なんて言われちゃったら嫌だなーって」

「なるほど……しつかりしてますね。旦那さんとは……おつと……」

口が滑ったとはこのことだ。日頃から妻にも、あなたは辛辣すぎる、正しければなにを言ってもいいわけではない、と叱られるぐらいだ。ましてや、よその亭主をどうこう言うのは大問題である。

ところが、慌てて頭を下げまくったシンゾウに、女は呵々大笑かたしやうだった。

「そんなに謝らなくても大丈夫です。慣れますから」

「慣れる？」

「ええ。うちの人、本当に口が重くて、誤解されることも多くて……。あ、でも、考え方はしっかりしてるんですよ。前の店の様子を調べなきゃ、って言い出したのもあの人なんです」

「そうだったんですか……。いや、それにしたって失礼すぎました」

「いいんですって。私はむしろ安心しました。ご近所に、こんなにはっきり言ってくださる方がいるのは嬉しいです」

「煙けむたくないですか？」

「ぜんぜん。私たちが変なことをやってたら、注意してもらえらるだろうなって思えます」

「そいつはどうも……」

「この話をしたら、きっと夫はあのお店を借りることにすると思います。そうしたらご近所さんになります。よろしくお願いしますね」

女は深々と頭を下げて、店を出ていった。

一月末の昼下がり、前は別々に買い物に來た夫婦が今度は揃って現れた。

男はスーツではなく襟えりのあるシャツにジャケット姿だったが、前に來たときよりは明らかに改まった服装に、シンゾウは思わず笑みを浮かべた。

「お決まりになりましたか？」

男は無言で頭を下げただけ、口を開いたのはやはり女のほうだった。

「おかげさまで。これから少し手を入れて、それが終わりで次第店を開けたいと思います」

「それはよかった。楽しみにしていますよ」

「ありがとうございます。それで、工事が入るとうるさくなるので、近隣の方にご挨拶に上がりたいんですが、どこまでお伺いしたらいいのかわからなくて……」

「挨拶なら工事屋がするんじゃないですか？」

「もちろん工事屋さんは行かれるでしょうけれど、店を開いてお世話になるのは

私たちですから、やっぱり私たちもご挨拶したほうがいい、ってこの人が……」

そう言いながら、女は男を見た。

——なるほど、いつもこうやってフォローしてゐるってわけか……

実際に男の考えかどうかはわからない。まるきり嘘だとは思わないが、ふたり一緒に考えた可能性は高い。それでも男の手柄にすることで、男の印象がぐっと上がる。なかなか見事な采配だった。

「そうですか。そうした意味での挨拶なら、できれば全部の店に……」

「あ、お店はもちろん全部回らせていただくつもりです。お聞きしたいのは、それ以外にも伺ったほうがいいところがあるかどうかなんです」

「それ以外？」

「裏手にアパートが一棟と、お店をやられていないお宅が何軒ありますよね？」
立地から考えて、この商店街の利用者である可能性は高そうだ。やはり一声かけておくべきだと思うが、人によっては煩わしいわづらと思うかもしれない、と女は言う。
あまりにも心配そうな様子に、シンゾウは思わず顔をほころばせてしまった。

「そこは気にしなくて大丈夫です。この町は、今時珍しいぐらい付き合いが深いんです。商いあきなをしている人間もそうじゃない人間もツーカー。むしろあんた方のほうが煩わづわしく思うかもしれません」

「ツーカーですか……。古くから住んでいらっしやる方ばかりなんでしょうね……。私たち、ちゃんと受け入れていただけるでしょうか……」

「馬鹿なこと言なよ」

そこで初めて男が口を開いた。眉間には深く皺しわが寄っている。

また女が代弁するのかと思いきや、彼女は黙って男の言葉を待っている。男はちらりと女を見たあと、思い切ったように話し始めた。

「俺たち、この商店街で何度も買い物をしてみただろ。こちらはもちろん、八百屋だって魚屋だって肉屋にだって行ってみた。みんな気持ちのいい商いをしていないか」

「そうだったわね。八百屋さんは、持ち帰るのが大変だからお葱ねぎや大根を切ってあげようか、って言うてくださったし、魚屋さんはアラがあるからよかったら持つ

ていくかって訊いてくださった」

「肉屋が秤はかりにのせたのは、頼んだ量ぴったりだった。あれはすごい技だ」

「びっくりしたわよね。にもかかわらず、あとからお肉をちよつと足してくれた。おまけだよ、って……。私たち、お馴染みでもなんでもないのに……」

「な？ しかも値段が変わらないように値札シールを打ち出したあとで、だぞ。ああいう商いをする人たちが、新参者だからって仲間はずれにするわけがない。俺たちがちゃんとしてさえいれば、受け入れてくれるさ」

「そのとおり！」

シンゾウは思わずレジカウンターを手で打った。

客を分け隔へだてしない——頭ではわかっていても、実行しづらいことだ。ついつい馴染みの客には親切にしたいくなるし、一見いちげんさんには一線引きたくなるのが人というものだ。にもかかわらず、この商店街では平等な接客ができている。それが喜ばしいのはもちろん、それ以上に、接客を見た男が「仲間はずれになんてするわけがない」と断言してくれたのが嬉しかった。

しかも、男は「俺たちがちゃんとしてさえいれば」と前提条件までつけた。まさに、前に女が言っていたとおり、口が重くて誤解を受けやすいが考え方はしっかりしていると思える男だった。

「この町なら大丈夫、あんた方なら大丈夫。そう言わせてもらおうよ」

言わせてもらいます、ではなく、言わせてもらうよ——ほんの少し砕けた口調にシンゾウは、自分がすでにこの夫婦を『この町の住人』として受け入れたことを感じる。そして彼らがよりスムーズに仲間入りができるよう、あれこれ手助けしてやろうという気持ちになった。

「できれば挨拶回りは裏通りまで行ったほうがいい。とはいえ、一軒家はほとんどが年寄りだから夜が早いし、アパートは共働きが多くて昼間は留守がち……こいつはちよいと面倒だな。間を取って夕方ぐらいに回るしかねえか」

そんなシンゾウの言葉に夫婦は顔を見合わせたあと、女がためらいがちに言った。

「夕方って、どちらもお忙しいでしょう？ ご挨拶に上がって迷惑をおかけする

のはちょっと違う気がします。やっぱりお昼と夜に分けて伺うことにします」

「そりゃあ、そのほうがいいには違いねえが……」

この商店街は駅から遠い。何度も来るのは大変だろう、と心配すると、女はにっこり笑って答えた。

「大丈夫です。実は私たち、この近くに住むことにしたんです。引っ越したあとなら、昼でも夜でも……」

「近くに住むって、このあたりのアパートって言えばあそこぐらいだが、空きはないはずだし……」

「アパートじゃなくて一軒家です。近くと言っても、歩いて十分ぐらいはかかりますけど」

「一軒家……もしかして二階建て、瓦屋根の？」

「たぶん、それです。これまで住んでいた方が近々養護施設に入るそうで、そのあとに……」

そういえば、少し離れたところに古い家があった。年寄りがひとりで住んでい

だが、足腰が立たなくなる前に養護施設に入りたがっていると聞いた覚えがある。他に空き家はないし、きっとあの家のことだろう。借りたのか買ったのかはわからないが、この商店街に通ってくるには便利に違いない。

「そうか。なら大丈夫だな……。となると、あんた方は職場も住まいもこの町内っ
てことか」

「そうなんですよ。だからこそ、ご挨拶はしつかりと思って……」

「なるほどな。じゃあ、とりあえず『魚辰』に面通しからだな。おーい、サヨ！」

シンゾウは店の奥に声をかける。すぐに妻のサヨが出てきた。

「はいはい、なんでしょ？ あら、もうご挨拶回り？」

サヨは夫婦者に軽く会釈した。夫婦もぺこりと頭を下げる。『挨拶回り』と言うところを見ると、事情はわかっているのだろう。もしかしたら、シンゾウが不在のときに買い物に来たのかもしれない。こいつは話が早い、とシンゾウは白衣を脱ぎながら言った。

「ちよいと『魚辰』に行ってくるから、店番頼む」

「はいはい。ミチフミさんよろしくね」

『魚辰』の店主、ミチフミは現在の町内会長である。この町で商売をするにしても、住むにしても、ミチフミに紹介しておくほうがいい。目下、息子のミチヤを仕込むのにてんやわんやではあるが、もともと気のいい男だから、あれこれ便宜を図ってくれるだろう。

「お、薬屋じゃねえか。昼間っから珍しいな」

『魚辰』の前に着くか着かないかのうちに、威勢のいい声が飛んできた。

胸から下をすっぽり覆うゴムの前掛けに長靴、『魚屋でござい』と言わんばかりの姿で話しかけてきたのは店主のミチフミだ。店頭に息子はいないから、おそらく奥で魚を捌く練習でもしているのだろう。

「こんにちは、ミチフミさん。今日はちょっと紹介したい人がいて」

「紹介？ なんだよ改まって」

そう言いながらシンゾウの後ろを見たミチフミは、小さく「お……」と声を上

げた。夫婦は揃って頭を下げる。

「これが、うちの町内会長だ。気はちよいと短けえが、面倒見はいい。困ったことがあったらこの人に言えばいい。で、こっちは……」

そこで夫婦を紹介しようとしたシンゾウは、まだふたりの名前を知らないことに気づいて苦笑した。気配を察したのか、女がすかさず自己紹介を始める。

「今度、この先のお店をお借りすることになった久保田と申します」

「あーはいはい。不動産屋から聞いている。居抜きで居酒屋をやるってご夫婦だな？」

「そうなんです。よろしくお願いしますね」

「こっちこそよろしくな」

そこで夫婦は、また揃って頭を下げた。

「でもって、家は高木^{たかき}さんのあとに入るんだってさ」

シンゾウの言葉に、ミチフミは急にしんみりして呟くように言った。

「高木さんか……。そういや、前に来たときに近々ここを離れるって言ってた。長い付き合いだから、寂しくなるな……」



「でもまあ、本人の望みどおり元気なうちに引越せるんだから、よかつただろう」
 「だな。別れがあれば出会いもある、それが人生つてもんだ。そうか、『久保田さん』
 だな。覚えとくよ」

ミチフミがそう言いながらふたりの顔を見ているところに、奥から息子のミチヤが出てきた。

「親父、サバ終わったぜ」

「そうか。やけに早いな……見せてみる」

ミチフミはふんぞり返って奥に入っていく。すぐに大きな声が聞こえた。

「てめえ、何度言えばわかるんだ！ 早けりゃいいってもんじゃねえぞ！ こんな『ぐだぐだ』が売りもんになるか！」

「そんなこと言ったって、サバは初めてなんだからしょうがねえだろ！」

「サバは初めてでも、アジはやったことあるだろ。この間のアジはけっこうまともだった。アジがこれぐらい捌ければ、サバを任せて大丈夫だろうと思ったのに」
 ぶつぶつ言いながらミチフミが戻ってくる。後ろをついてきたミチヤが、夫婦

の顔を見て目を輝かせた。

「あ……どうも！ この間はあるがとうございました！」

さつきまで不満たらただった口調もどこへやら、元気いっぱい挨拶をする。もちろんミチフミは怪訝な顔、シンゾウもおそらく同じような表情になっているだろう。まさかミチヤがこの夫婦を知っているなんて思いもしなかった。

「この間？ どういうことだ？」

「俺がひとりで店番してたときに、この人が来て……」

「いらっしやった、だろ。このトンチキ！ それで？」

夫婦に向かって頭を下げ、ミチヤはまた話し始めた。

「やけにきれいに仕上がってると思ったら、この方に教えてもらったってわけか」
 ミチフミは頭を左右に振り、呆れきった様子だ。

さつきこの夫婦は、商店街のあちこちで買い物をしてみたと言っていた。魚屋にも寄ったと聞いていたが、シンゾウも、まさか魚屋の跡取り息子にアジの捌き

方を指南していたとは思ってもみなかった。

「この方たちっていうか、旦那さんだけど。俺が店番がてらアジの練習をしてるとこに通るかかって……たぶん、俺が四苦八苦してるのを見かねたんだと思う」
「そんなことがあったの？」

女が驚いたように言ったところを見ると、夫婦が揃って買い物をしたのとは別の日の出来事なのだろう。そんなに頻繁に商店街を訪れていたのか、とシンゾウはびっくりしてしまった。もちろん、ミチフミもまじまじと男を見ている。ふたりにじつと見つめられ、男が重い口を開いた。

「いや……商店街って休みと平日、昼と夜でも様子が違うから、両方見ておきたいと思って時間を変えて何度か来てみたんです。確かあのときは土曜の昼過ぎ、俺ひとりでした」

「……あ、もしかして参観日のとき？」

「そう。おまえは保育園に行ってた。その間にちよつと見てくるか、って……」

夫婦の会話から子どもがいることがわかる。しかも保育園に行くような小さな

子どもだ。

子どもが増えるのは賑やかでいいな、などと思いつながら、シンゾウは話に耳を傾けていた。

「もう……土曜日の商店街の様子が見たかったのなら、そう言ってくればよかったのに。私、せっかくの参観日なのに、なんで一緒に来てくれないの、って怒ってたのよ」

「参観日ってなんか苦手なんだ……。それで、この商店街に来てふらふらしてたら、店先でこの子が包丁持ったまま固まって、これじゃあアジが傷^{いた}んじまうって、つい……」

もともとお節焼きではない。ただただ魚をだめにするのが忍びなく声をかけてしまった、と男は照れくさそうにしている。余計なことだったなら申し訳ない、とまで……

それを聞いたミチヤは慌てて言った。

「ぜんぜんだよ！ あのときのアジはびかびかですごくいいものだったんだ。そ

のせいで、包丁を入れる度胸が出なくて固まっていた。こんなの俺が捌いていいもんじゃねえって……。そこに『さっさとウロコを取っちゃいな。睨めっこしてる間にも鮮度は落ちるよ』って声が聞こえて、ああ、そうか、やらなきゃって……」

親父みたいにでかい声でもなければ、叱る口調でもない。ウロコの次はゼイゴを取る、そのあと頭を落として……と、ただ淡々と次にすることを教えてくれた。練習していたのは三枚下ろしで、最初は骨に身がたくさん残ってしまったが、力加減を教わりながら二匹、三匹と捌いていくうちにどんどん上手くなって、十四目にはかなりきれいに下ろすことができたのだ、とミチヤは嬉しそうに語った。

「その上、ぐちゃぐちゃになっちゃったのをまとめて買ってくれた。『証拠隠滅だ』って……。おかげで、残ったのはきれいに下ろせたアジばかり。珍しく親父にも褒められた。な、親父？」

ミチヤに顔を覗き込まれ、ミチフミは渋々のように頷く。

「確かに。二、三匹しか下ろしてねえにしては上手くてできた」

「だろ？ あれで自信がついたんだ。もうアジは大丈夫、って。でもサバはアジ

よりでかいし、身も柔らかくて、やつぱりぐちゃぐちゃになっちゃった」

さっきまで浮かんでいた誇らしげな表情はどこへやら、ミチヤは捌いたばかりのサバを見て、しょんぼりと肩を落とす。男は、そんなミチヤを力づけるように言った。

「大丈夫だ。アジが下ろせればサバもいける。さっき親父さんも言ってたけど、魚なんてどれも似たようなものだ。サバはゼイゴがない分、アジより一手間少なくてすむくらいだよ」

「そっか……。確かにウロコを取って、頭を落として、内臓を出すのは同じだね」

「そのあと二枚か三枚に下ろす。必要なら皮を引く。基本はそれだけだ」

まあ、カレイやヒラメはちよつと違うし、ウナギやナマズは別物だけどな、と男は口の端だけで笑った。素直に頷くミチヤを見て、ミチフミが不満そうに言う。

「おいミチヤ、それは俺が散々つばら教えたことだろー！」

「だーかーらー！ 親父みたいにがみがみ言われたら耳を素通りしちまうんだよ！」

「悪かったな！ 元はと言えば、おまえの呑み込みが悪いからじゃねえか！」

「おいおい、久保田さんたちの前だ、そこでやめとけよ」

やむなく割って入ったシンゾウの言葉に我に返ったのか、ミチフミは恥ずかしそうに耳の後ろを掻いた。

「申し訳ねえ。とにかく息子が世話になりました」

「いいえ……自分の子を仕込むのは特別な苦労があるでしょうから……」

「お……」

わかつてるね、とミチフミは目尻を下げる。

どうやら町内会長は、この新しい住人を気に入ったらしい。馬が合わないからといって嫌がらせをするような質ではないけれど、気に入るに越したことはない。まずはよかった、と安堵したシンゾウは、ついでに他の店も回ることにした。気分はまさしく『乗りかかった舟』だ。

そのままミチフミを加えた四人で商店街を回り、その日のうちに挨拶を終えることができた。驚いたのは、女が持っていた手提げ袋からちゃんと挨拶用の品が

出てきたことだ。

「用意がいいな……」

裏手のアパートや一軒家まで挨拶に行くべきかどうかを訊ねに来たのだから、挨拶用の品もこれから準備するとはかり思っていた。だが、驚くシンゾウに、夫婦はもともと商店街の挨拶は今日のうちに済ませるつもりだったと告げた。しかも手提げ袋から出てきたのは、引越した挨拶に使われがちな手ぬぐいや洗剤ではなく、二十センチぐらいの細長い包み、中身は太字と細字のサインペンだそうだ。「お店をやっていらっしやる方ばかりだから、サインペンなら使っていただけかなって。これ、ものすごく書きやすいって文房具屋さんのおすすめだったんです。あ、お店をやっていらっしやらない方へのご挨拶はこれとは別に用意するつもりですけど」

まとめて買ったら値段もずいぶん安くしてもらえた、と女は嬉しそうに言う。

ミチフミがすかさず訊ねた。

「文房具屋って、もしかしてミヤマさんで？」

「はい。これからお世話になるんですから、少しでも売り上げに協力させていただかなきゃ、と思ひまして」

「やっぱり……包み紙に見覚えがあると思ったんだ。にしても、いい心がけだ！」
ますます気に入った、とミチフミは大喜びで言う。

「気が利く嫁さんじゃねえか。こういう人が女将おかみなら、店は繁盛間違いないだ。な、薬屋、おまえもそう思うだろ？」

「ああ。開店するのが楽しみだよ。で、ご亭主、開店はいつごろの予定だ？」

「できれば寒いうち……なんとか二月中には開けたいと思つてます」

「そうか。じゃあ、日が決まったら知らせてくれよ。俺たちもできる限り宣伝するし」

「もちろんです。よろしくお願いします！」

女が元気に頭を下げた。男も無言でそれに倣なまう。

無口だが魚を下ろすのに難儀している若者に手ほどきをするばかりか、『証拠隠滅』と失敗作まで買い上げる。きっと自分が修業したときの気持ちを忘れずに

いるのだろう。この年で店を持つだけの資金を蓄たくわえられるほどだから腕のいい職人だろうし、修業中の気持ち、すなわち初心を忘れていないとしたら、さぞや丁寧な料理を作るに違いない。そこにおしゃべり上手で気配りのある女将までいる。このふたりがどんな酒を選び、どんな料理を出してくるのか楽しみでならない。シンゾウは、開店が待ちきれない気持ちだった。

+

二月に入るなり、居酒屋の工事が始まった。

とはいっても、大がかりなものではなく、看板や厨房ちゅうぼうの設備を少しいじる程度らしい。もともと建ててから二年ほどしか経っていないし、傷いたんでいるところもなかったのだろう。工事は一週間もしないうちに終わり、夫婦がまた『山敷薬局』にやってきた。

女が嬉しそうに言う。

「開店の日が決まりました。二月二十二日です」

「二月二十二日……そいつはまた、二揃いだな」

「調べてみたらお日柄もいいし、覚えやすいかなーって」

「確かにな。そうか、二月二十二日か……で、今更なんだが店の名前は？」

そこで夫婦は哑然としたように顔を見合わせた。今の今まで、店の名前を教えていなかったことに気づかずになっていたのだろう。慌てた様子で男がポケットに手を入れた。

「これを……」

そう言いながら差し出したのは一枚の名刺。真っ白な紙に『居酒屋久保田』『店主 久保田健吾』という文字、そして店の住所と電話番号が書かれていた。

「久保田健吾の店だから『居酒屋久保田』……なんていうか、まんまだな」

「すみません……もうちょっと凝ったほうがいいのかもしれませんが、思いつかなくて」

男、いや健吾が恥ずかしそうに言う。シンゾウは慌てて答えた。

「いやいや、悪く言ってるわけじゃねえ。むしろ、シンプルでいい名前だと思う。変に凝りまくられてもうちの商店街じゃ浮いちゃうし」

「そうですか……ならよかった」

「うん。いい名前だよ、『久保田』も『健吾』さんも」

「あ、ありがとうございます」

思いがけず名前を褒められて、健吾はさらに恥ずかしそうにしている。さらに、どういふつもりか姓名判断まで持ち出した。

「俺の名前って、総画が大吉で家庭運もすごくいいんですが、仕事運が大凶なんです。これから店を開くっていうのに、ちょっと心配です」

「あー仕事運なあ……実は俺もあんまりよくねえって言われたことがあるな」

「そうなんですか？」

「ああ。おまえさんと同じ、総画はいいが仕事運は凶だそうだ。でもまあ、そんなの気にすることねえよ。なんだかんだ言っても、俺もまだ店を潰しちゃいねえ。あ、でも……」

そこでシンゾウは、女の顔をじつと見た。

「なんでしょう？」

「いや、実はうちはかみさんの仕事運が大吉なんだ。もしかしたらなんとかやつてるのはそのおかげかもしれない。それで……」

「私の仕事運が気になった、つてことですか。うふふ……」

そこで女は、ものすごく嬉しそうに言った。

「私の名前は奈津美^{なつみ}っていうんですけど、この人とは逆で総画は凶、仕事運は吉だそうです。だから、プラマイゼロ。きつとなんとかあります」

「おまえは本当に脳天気だな……」

ほそりと呟いた健吾を、奈津美が睨むように見た。あなたみたいな頑固一徹には、これぐらい脳天気じゃないとつきあいきれないのよ、なんて言い返され、健吾はぐうの音も出なくなっている。

確かにこのふたりは『プラマイゼロ』、お互いの欠点を補い合えるいい夫婦だった。

「ま、新しい町に来て新しい店を開くんだから、どっちみちゼロからの出発だ。

せいぜい気張ってくれ。二十二日には必ず顔を出させてもらうよ。町内会長と他にも二、三人声をかけてな」

「よろしくお願いします」

そしてふたりは深々と頭を下げて帰っていった。

待ちに待った二月二十二日午後六時半、シンゾウは『久保田』に向かった。

店の前にずらりと並んだ花環から、せっせと花を抜いて配っているのは妻のサヨだった。

せっかく送られた花環を台無しにするなんて、とシンゾウは慌てて妻に声をかける。

「おいサヨ！」

「あら、あなた。お店はどうしたの？」

「今日は早じまいだ。新規開店で客が入らなきゃ気の毒だろ。それより、おまえ

はなにをやってるんだ？」

「ああ、これ？ 奈津美さんのご実家のほうでは、開店祝いのお花を皆さんに配る習わしがあるんですって。『花ばい』^{はな} って言うそうよ。お花が早くなくなればなくなるほど、お店が繁盛するらしいわ」

「だから配りまくってるってことか？」

「そう。このあたりでは誰も『花ばい』なんて知らないから、全然減らなくて奈津美さんが困ってたのよ。それで私が一役買うことにしたの。あ、タミさん、お花はいかが？」

そう言いながらサヨは、通りかかったクリーニング屋の店主にすかさず花を渡す。確かタミは完璧な下戸^{げこ}、酒は一滴も受け付けないと言っていた。そんな相手に花を配らなくても、と思ったが、『花ばい』というのは将来の客を見込んで渡すものではないらしい。大事なものは、とにかく『早く』花環を空っぽにすること、と説明しながら、サヨはせっせと花を抜いては道行く人に渡し続ける。ぼうっと見ているわけにもいかず、シンゾウも手伝うことにした。

シンゾウが加わってしばらくしたころ、暖簾^{のれん}を掻き分けて奈津美が出てきた。残り数本になった花環を見て嬉しそうな声を上げる。

「もうこんなに……大変だったでしょう？ ありがとうございました！」

「いいのよ。お花って買うとけっこう高いから、皆さん、喜んで持って帰ってくださったわ。それに、お花を配るなんて滅多にできない経験ですもの。楽しかったわ」

「だといいんですけど……。シンゾウさんまで手伝ってくださったんですね」

「とんだ花売り爺^{じい}だよ」

「爺だなんて……」

全然そんな年じゃないでしょう？ とクスリと笑ったあと、奈津美はふたりを店内に誘った。

「中で一杯呑んでいってくださいな。夫もお礼をしなきゃって言ってますし」

「礼なんていらないけど、俺はもともと呑みに来たんだから邪魔するよ。おめえはどうする？」

「もちろんお邪魔するわ。『久保田』のお客第一号は私たちよ」
「第一号って……」

開店してから小一時間は過ぎている。その間、誰も来ていないのか、と驚きながら入ってみると、確かに店内に客はひとりもいなかった。

「おいおい、なんだいこの風通しのいい店は！」

精一杯明るい調子で発した言葉は功を奏さず、返ってきたのは健吾の辛そうな声だった。

「すみません……開店日なのにこの有様です……」

「本当に誰も来てねえのかよ」

「はい。さっぱりです」

「せめて『サクラ』を呼んでおくとか、考えなかったのか？」

「ちょっとあなた、『サクラ』はないでしょ」

サヨがシンゾウの袖を引っ張って注意してくる。だが、シンゾウにしてみれば『サクラ』は悪いものではない。とりわけ開店日は、友人知人を総動員してでも

店を一杯にして『繁盛している感』を見せるべきだと思っている。そうやって仲間を呼べる人望も、店主の魅力のひとつだと考えているぐらいだった。

「駆けつけてくれる仲間もいねえのかよ……」

「そうじゃないんです！」

そこに聞こえてきたのは、出会ってから初めて聞く奈津美の怒りを含んだ声だった。すかさず健吾が止める。

「奈津美、おまえは黙ってろ！」

「だって！」

「だって、じゃねえ。来てくれる人がいない、つてのは本当のことじゃないか」

「本ただけど、ちゃんと理由があるじゃない！」

「えーっと……おふたりさん。もしよければ、その理由ってやつを聞かせてくれねえか？」

気になってならん、と言うシンゾウに、奈津美は勢い込んで話し始めようとした。そこでまた、健吾が止める。ただし、今度は話させないためではなく、シン

ゾウとサヨを座らせるためだった。

「とりあえず座ってください。奈津美、おふたりに飲み物を……」

「あ、ごめんなさい！ なにを吞まれますか？」

奈津美は大慌てで品書きを差し出す。開いてみると、そこにはずらりと酒の名前が並んでいた。

「すごい品揃えだな……こいつはちよいと度肝を抜かれたぜ」

「ほんと……」

サヨも啞然としている。

シンゾウは昔から酒好き、とりわけ日本酒には目がない。大抵の銘柄なら、味や香りは言うまでもなく、どこで造られた酒なのか、手に入れやすいか否かぐらいは判断できる。夫の影響で、サヨもかなり酒の銘柄には詳しくなった。そんな夫婦が息を吞むような銘柄が、品書き一面に書き込まれているのだ。

「言っちゃあなんだが、こんな品揃えは期待すらしてなかった。せいぜいビールと地酒が二、三種類あれば御の字だと思ってたんだ。いやあ、これは嬉しい……」

おや？ 生ビールがないな……」

居酒屋に入るなり『生ビール！』と叫ぶ客が多い。特に夏はそんな客の割合がぐっと上がるだろう。もしかしたら、今は冬だから生ビールは扱わず、日本酒に特化しているのかもしれない。

だが、そんな考えは健吾の言葉であっさり否定された。

「すみません。うち、生ビールは扱わないんです」

「夏でも？」

「はい。俺は日本酒の管理と料理で手一杯なんです。とてもじゃないけどビールサーバーまで手が回らなくて……」

力不足ですみません、と健吾は頭を下げる。真新しい和帽子の白さが目に沁みるようだった。

「なるほど……そいつはなんとも潔いな」

「ビールサーバーの管理は大変だって聞いたことがあるわ。いい加減なことをしてなにかあったら大変だものね。うん、私はそういうのってすごいと思う」

サヨは何度も頷きながら、品書きに目を走らせる。だがあまりにも多すぎて、どれを選んでいいかわからないらしい。かく言うシンゾウも目移りして決められない。

困り果てて顔を上げると、健吾がこちらを見ていた。

「『全部です』って言われるのは覚悟で訊くが、なにかおすすめてのはあるかい?」

「基本的には酒を料理に合わせるか、料理に酒を合わせるか、になりますが……とりあえず突き出しに合いそうな酒選んでよろしいでしょうか?」

「ああ、それでいいよ」

「では金沢の……」

健吾が銘柄を告げる前に奈津美が動いた。

酒が入っているらしき冷蔵庫の扉を開け、迷いもなく瓶を取り出す。奈津美が手にした瓶を見て軽く頷いた健吾は、小鉢に突き出しを盛り付け始めた。

「あ……」

健吾の手元を見ていたサヨが、ぱっと顔を輝かせた。

小鉢にたっぷり盛り付けられたのは、三センチぐらいのぶつ切りにされた葱^{ねぎ}だった。焦げ目が見えるから、炙^{あぶ}ってから醤油だれに漬け込んだのだろう。葱が大好物のサヨには嬉しい突き出しに違いない。

背後からグラスと杓^{すく}、カウンターの向こうから小鉢が出された。ほぼ同時といていいタイミングに、息が合った夫婦だなど感じさせられる。

最初に感じたのは、小鉢から立ち上る胡麻^{ごま}の香りだった。

「あら……胡麻油を使っているのね」

さらにサヨは大喜び。味も香りも身体にいいことまで含めて、胡麻油もサヨのお気に入りだった。

「お葱を胡麻油を引いたフライパンで焦がして、醤油と味噌^{みそ}を合わせたタレに漬け込んでいます。簡単ですから、おうちでも作れますよ。今日はしっかり焼いてくつたりさせましたが、さっと焼いて菌^{きん}ごたえを残すのも乙です」

健吾はすらすらと説明する。いくら簡単な料理とはいえ、こんなに惜しげもな

く作り方を披露していいものか。それ以上に、普段はあれほど口が重い男が、料理についてならこんな話すのか、とシンゾウはびっくりしてしまった。

さらに驚かされたのは、酒の説明だった。健吾は、奈津美がふたつのグラスに酒を注ぎ終わるのを待ちかねたように言う。

「『加賀鶴^{かがつる} 純米吟醸 金沢』です」

その一言で、彼の日本酒についての造詣^{ぞうけい}の深さがわかった。なぜなら、居酒屋で酒を出すときに、ここまで正確に銘柄を口にすることは稀^{まれ}だからだ。シンゾウはあちこちで酒を呑んでいるが、銘柄を告げられるにしても一部、この酒の場合ならせいぜい『加賀鶴』、あるいはラベル中央にでかでかと書かれた『金沢』だろう。それなのに健吾は、流れるように『加賀鶴 純米吟醸 金沢』と言った。

酒は使う米や麴^{こうじ}の種類、どこまで米を削るか、出荷前に火を入れるかどうか、醸造用アルコールを添加するか否か……などによって、仕上がりが異なる。同じブランドであっても、ぜんぜん味わいが違うというのはよくあることなのだ。酒の名をきちんと告げるのは、それをわきまえている証拠であり、酒への敬意の表

れだ。

さらに、驚いているシンゾウをそっちのけで蔵元の紹介が始まった。

「これを造っているのは金沢市にある、やちや酒造。天正十一年に、神谷内屋仁^{かみやうちやじん}右衛門^{うゑもん}が加賀藩主を拝命した前田利家公専用の酒を造るために、尾張から移住してきたのが始まりです。寛永五年に前田家から『谷内屋^{やちや}』という屋号と『加賀鶴』という酒の名を授かり、今に至ります。『加賀鶴 純米吟醸 金沢』は少し辛口で後味がきれいなので、和食はもちろん洋食にもよく合います。揚げ物やムニエルなどもおすすめです」

「確かに、この酒なら多少こつてりめの料理でも合うだろうな……」

健吾の目がわずかに見開かれた。シンゾウの言葉から、この酒を知っていることを読み取ったのだろう。もちろんシンゾウはこの酒を呑んだことがある。伊達に長く酒を嗜^{たしな}んでいるわけではないのだ。ただ蔵元のことまでは知識は及ばず、健吾の説明に感心するばかりだった。

「大将、プロ相手にこんなことを言うのは失礼かもしれませんが、ずいぶん詳しいな。」

こんなにすら蔵元についてまで語られるとは思わなかった」

おそらくこの間のように照れた笑みを浮かべるだろう、と思った。だが、シンゾウの予想に反して彼は至って真面目な顔で言った。

「酒は蔵元や蔵人あってこそのもです。大変な努力と研鑽けんさんの上に生まれるのが酒。でも、蔵元の想いまで汲みながら酒を呑む人はとても少ないんです。俺は、その蔵元がどこにあつて、どういう歴史を経てきたかまでお客様に伝えたい。自分勝手な思い込みですけど、そういった情報をほんの少しでも伝えることで、酒の味がまた少し上がるような気がするんです」

「……見上げたもんだな」

シンゾウにまじまじと見つめられ、健吾は今度こそ照れ笑いを浮かべた。そして、また俯うつむいて手を動かし始める。やはり彼は、ほとんど客と話をしないタイプの料理人らしい。話しかけられれば答えはするが、ここまで饒舌じょうぜつになるのは、料理や酒の説明だけなのだろう。

「このお葱ねぎ、ものすごくあなた好みよ」

早く食べてみなさいよ、とサヨに促うながされ、シンゾウは箸を手にとった。ぶつ切りの葱を挟んだだけで、柔らかなさが伝わってくる。薬屋という職業柄、健康には気を遣っているし、齒の衰えを感じる年齢ではない。きんぴらゴボウにしても齒ごたえがあるもののほうが好みだが、葱だけはしっかり火が通っているほうがいい。加熱によって引き出される甘みがたまらないのだ。

「なんとも言えない甘みだ。胡麻油ごまがいい仕事をしてるし、タレの加減もちょうどいい。これは酒がすすむ」

「よろしければ、もう少し……」

「あなた！」

そこで奈津美が小さく咎めた。健吾が、葱の入っているプラスチック容器に伸ばしかけた手を慌てて引く込める。奈津美の口から、もう……という声が漏れたとたん、サヨが笑い出した。

「大将、突き出しのおかわりなんてさせてたら、商売あがったりよ。ご心配なく、ちゃんと別のお料理を注文するわ。突き出しがこれなら、他も期待大よ」

「まったくだ。お、『おすすめ』の品書きがあるのか」

壁のホワイトボードに『本日のおすすめ』が書かれていた。焼き物、煮物、揚げ物に加えて、蒸し物もある。食材も肉、魚、卵、野菜と多彩だった。

「私は出汁^{だし}巻きにするわ」

「じゃあ俺はホタルイカ为天ぶら」

出汁巻きと天ぶらは腕の差が出やすい料理だ。他にもメニューはあるのに、あえてこの二品を頼むのは、ちょっと意地が悪いかもしれない。だが、健吾は何食わぬ顔で四角い玉子焼き用のフライパンを火にかける。使い込まれて鈍く光るフライパンが『まかせとけ』と言っているようだった。

卵液を二度、三度と流し込む。もう少して焼き上がり、というところで、引き戸が勢いよく開いた。

「すまねえ、遅くなった！ お、サヨさんも一緒か。お疲れさん」

そう言いながら入ってきたのはミチフミ、後ろに肉屋のヨシノリと文房具屋のミヤマがいた。

「お疲れさま。先に始めさせてもらってるわ。それにしても、ミチフミさんが遅れるなんて珍しいわね」

ミチフミはせっかちな質^{たち}で、早め早めに行動する。町内の会合でも、早く来ることはあっても遅れたことはなかった。今日は六時前後に『久保田』で、と約束していたのに、今はもう七時近い。サヨに、珍しいと言われるのも無理はなかった。

そこで頭を下げたのは、ミヤマだった。

「『魚辰』さんのせいじゃない。うちが遅かったんだ。店の閉め際に、ちょっと待ってくれて電話が来て……」

「子どもさん？」

「ああ。明日図工で粘土がいるのに、買い忘れてたって」

いつもなら妻に任せられるけれど、今日に限って出かけていた。閉店時刻は過ぎていたが、学校で必要なものが揃わないのは気の毒だということで、子どもが来るのを待っていたそうだ。